

# 多部制定時制高校は学校的「秩序」をどのように扱うべきか —山口昌男の「秩序」、「混沌」概念をたよりに—

伊藤 晃一

千葉大学人文社会科学部研究科博士後期課程

本稿は、文化人類学者、山口昌男の『文化と両義性』の「秩序」と「混沌」概念をたよりに多部制定時制高校の現状を解釈し、その課題を明らかにすることを目的としている。2019年現在「多様な生徒たちの学びのニーズの受け皿」としての役割を期待されている定時制高校では、従来の夜間定時制高校の統廃合が進み多部制定時制高校への転換がなされており、それに伴い新しい定時制高校のあり方が模索されている。しかしその模索が学校的な「秩序」を志向するのであれば慎重になる必要がある。従来の夜間定時制高校は、一般的に考えられる学校像を「秩序」側とするならば、むしろ「混沌」側であることを引き受けた上で独自の教育方法を採ろうとしていた。文化人類学の知見から「混沌」なきコミュニティがやがて終焉を迎えることを示唆した山口の視座に立ち、「秩序」を志向しながら「混沌」であることを引き受けるようなバランスの取り方を示唆した。

キーワード：「中心-周縁」図式、定時制高校、「秩序」、「混沌」、授業

## 1. はじめに

本稿は、文化人類学者、山口昌男(1931-2013)の『文化と両義性』(1975)における「秩序」、「混沌」概念を定時制課程の高等学校(以下、定時制高校とする)の現状に引きつけながら解釈することを目的としている。

まず本章では、なぜ定時制高校の現状を解釈する必要があるのかについて述べる。

2019年現在、定時制高校は転換期にある。

従来の夜間定時制高校は統廃合され、午前・午後・夜間の三部を持つ単位制の高校、通称「三部制の定時制高校」や、朝や昼に授業時間が設定される通称「昼間定時制高校」への転換がなされている。本稿では、これらの新しい定時制高校を「多部制定時制高校」(複数の部を持つ定時制高校の意)と呼ぶ。

このような転換がなされている大きな要因として、社会情勢の変化が挙げられる。社会情勢の変化によって定時制高校の社会的な役割も変化した(板橋 2007)。

近年の定時制高校は、「多様な学びのニーズへの受け皿」(文部科学省 2013)と表現されるように、いわゆる「勤労青年」のみならず、

- ・ 全日制課程の高等学校(以下、全日制高校)に

馴染めなかった者や何らかの理由で進学できなかった者

- ・ 義務教育での不登校経験者
- ・ 外国につながる者

の学ぶ場として今日的役割を与えられている。

定時制高校には、それまでの学校生活に何らかの理由でうまく馴染めなかった者が一定数いることが考えられる。

馴染めなかった理由は様々あるだろうが、少なくともそのような生徒たちを一定数受け入れる定時制高校では、彼・彼女らが経験してきた学校とは異なる、新しい学校のあり方を模索する必要があるはずだ。ことさら、新しい定時制高校のあり方を模索している多部制定時制高校においては、この課題を真剣に考えなければならない。

それでは、なぜ、このような現状にある定時制高校を、『文化と両義性』における「秩序」、「混沌」概念をたよりに解釈すべきなのだろうか。

## 2. 『文化と両義性』の「秩序」、「混沌」概念をたよりに定時制高校の現状を解釈する意義

本節では、『文化と両義性』がいかなるテキストであり、「秩序」と「混沌」とはどのような概念なのかを整理した上で、それらの概念を定時制高校の現状に引きつけながら解釈する意義を述べる。

なお、本稿で用いる『文化と両義性』のテキストは

Koichi ITO: How to Deal with "Order" of School about Multi-Part Time High School -Referring to Yamaguchi Masao's "Order" and "Chaos" Concept- Graduate School of Humanities and Social Sciences, Chiba University

2000年5月16日に岩波現代文庫にて刊行されたものとする。

## 2.1. 『文化と両義性』及び「秩序」、「混沌」概念についての概要

山口は『文化と両義性』において、古今東西の神話をはじめとする物語を取り上げながら、文化を中心性と周縁性という二項対立的な枠組みを用いながら解釈した。山口のこのような文化の捉え方は「中心-周縁」図式（東2017）などと呼ばれている<sup>1</sup>。

「中心-周縁」図式を説明する際、代表的な二項対立的概念として挙げられるのが「秩序」と「混沌」である。それらは文化における「中心」と「周縁」に対応している。文化の「中心」は光が当てられ「秩序」だっている。一方でその文化の「周縁」は光の当たりきらない「混沌」の状態にある。「混沌」の状態にある場所は「秩序」の中にいる人々にとって忌み嫌われる。しかし一方で文化の成立や発展には「混沌」である「周縁」こそが重要な役割を担う。

シュールレアリストが明らかにしたように、混沌こそは、すべての精神が、そこへ立ち還ることによって、あらゆる事物との結びつきの可能性を再獲得することができる豊饒性を帯びた闇である。（p.1）

この引用が示すように、山口は特に文化研究の中でそれまで十分には検討されてこなかった「周縁」、「混沌」の側に着目し、そこに文化を成立、発展させる重要な意義を見出した。

さらに「秩序」、「混沌」概念について確認していこう。山口は次のように言う。

混沌から身を引き離れた瞬間に、彼は混沌を対象化する。混沌の対象化は、秩序の確認への第一歩であったことは疑えない。（p.1）

「混沌」とは、物事や出来事を「対象化」できていない状態のことを指す。人々は「混沌」から身を引き離すことができれば、「混沌」にある物事や出来事を「対象化」できるようになる。「対象化」とは客観的に物事や出来事、それらの関係性を捉えられることだとしておこう。そうすると「秩序」とは、物事や出来事やそれらの関係性を客観的に捉えられることができる状態と言うことができる。

また山口は次のようにも述べる。

我々の概念は、文化の中心に位置する、または近い

事象であればあるほど一元的であって、差異性の強調がなされる。それに対して、周縁的な事物についての概念は、それが明確な意識から遠ざかっているゆえに、「曖昧性」を帯びている。曖昧というのは多義的であるということに他ならない。（p.7）

文化の中心に行けば行くほど概念の意味は「差異性」が強調され、より「秩序」だったものになる。反対に、中心から離れ周縁に行けば行くほど概念の意味は「曖昧」＝「多義的」なものになり「混沌」さが増していく。「秩序」と「混沌」を暫定的に定義づけておこう。

秩序…物事や出来事が客観的に捉えられる状態。その存在のために「混沌」を必要とする。文化においては、中心に近づくほど概念は差異性が強調され一元的な意味を持つ。

混沌…客観的に物事や出来事を捉えられない状態。その存在のために「秩序」を必要とする。文化においては中心から離れるほど概念は曖昧で多義的な意味を持つ。

## 2.2. なぜ『文化と両義性』の「秩序」と「混沌」を定時制高校の現状に即して解釈する必要があるのか

1章で述べたとおり、定時制高校は現在進行形で、その新しいあり方を模索している。

定時制高校は、発足時、働きながら学ぶ、いわゆる「勤労青年」のための学びの場として機能していた。生徒たちの多くは貧困のために朝から働く必要があったため授業時間は主に夕方から夜にかけて設定され<sup>2</sup>、1日4時間の授業で修業年限も4年以上とされた。主に夕方から夜の時間帯に授業時間が設けられていたことから「夜間定時制高校」と呼ばれた。

しかし、発足当初勢いよく伸びた生徒数・学校数は、1955年をピークに1980年あたりにかけて激減していき、それは時代の変化に伴い「勤労青年」の数が減少したことが原因とされている。

1980年から2010年あたりに向け、いわゆる「ヤンチャ」な生徒が目立ち、「荒れる定時制」などと揶揄されることもあったが、近年その傾向は落ち着きを見せ<sup>3</sup>、生徒数に関していえば1999年から約11万人（高校生全体の約3%）程度を維持するようになった<sup>4</sup>。これは、それまでの学校での学びに何らかの理由でうまく馴染めなかったり傷ついてきたりした生徒たち、いわゆる不登校傾向の生徒たちが一定数入学するようになったことが理由である。

多部制定時制高校は、このような背景の中で生まれて

きた学校である。多部制定時制高校では、単位制が採用されており、修業年限が3年以上であることも可能である。夜間部に通う生徒以外は、もはや夜の時間帯に学校に通う必要はなく、一見すると全日制高校と変わらない学校になっている。

さて、多部制定時制高校を学校として成立させるためには、様々な課題に向き合わなければならない。大別すれば次の二つの課題が挙げられる。

一つ目は、従来の夜間定時制高校より、さらに多様化した生徒たちへの対応である。先にも述べたように現在の定時制高校は「勤労青年」のみならず全日制高校に進学できなかったり馴染めなかったりした者や、義務教育での不登校経験者や、外国につながるのある者の学ぶ場として今日的役割を与えられている。またこれらに加え、特に多部制定時制高校では、以前まで全日制高校で受け入れていたような生徒たちも入学するようになっており、ますます多様になる生徒たちの「ニーズ」に学校としていかに応えうるのかという方途を模索している。

二つ目は、一般的な全日制高校と比べてより複雑にならざるを得ないシステムをいかに構築していくかについてである。一つの学校に複数の部があり、それを生徒たちの現状に即しながらどのように機能させていくのか。このことについて多部制定時制高校の教員が知恵を出し合っている状態であることは想像に難くない。

それではなぜ『文化と両義性』を定時制高校の現状に引きつけながら解釈すべきなのか。定時制高校にまつわるこれらの状態を念頭に、先の「秩序」と「混沌」の議論を思い返してほしい。

多部制定時制高校はまさに今「混沌」の状態であると言えないだろうか。多様化する生徒をどのように捉え、指導、支援していくべきなのか。あるいはそれを支える学校のシステムをどう構築していくべきなのか。この状態を精緻な言葉として対象化するのには難しい。

しかし先の山口の議論をなぞるならば、「混沌」があるからこそ「秩序」は生気づけられる。この「混沌」の状態をどうかしようと日夜奔走する教員も少なくない。

このような新たな定時制高校のあり方の模索は、素朴には学校としての「秩序」を志向してなされると考えられる。先に挙げた「混沌」の状態を考えるならば、それは当然のことであろう。

しかし、である。もう一步踏み込んで考えたい。もしその模索が学校的な「秩序」を志向され行われるのであれば慎重になる必要はないだろうか。

現在定時制高校に通う生徒の中には、これまでの学校生活にうまく馴染めなかったような一定数があると考えられる。このような生徒は、実は学校としての「秩序」なるものに馴染めなかった者であったと考えられない

だろうか。もしそうだとしたら定時制高校において志向される「秩序」は、それが定時制高校教育に携わる者の善意によってなされているとしても、その意図に反して生徒たちを傷つけてしまうことになりかねないのではないか。

このようなことを検討するためには、まずは学校という文化の「中心-周縁」図式を読み解き、そこでの問題を整理しなければならない。そしてその上で、現状の多部制定時制高校の課題を明らかにしなければならない。

新たな定時制高校における課題の検討はまだ道半ばである。しかしながら「中心-周縁」図式あるいは「秩序」や「混沌」といった文化人類学的な知見を用いてそれを検証するような研究はまだなされていない。

それゆえ、本研究に取り組むべきなのである。

### 3. 研究の目的と方法

本研究の目的は、文化人類学者、山口昌男の『文化と両義性』における「秩序」と「混沌」概念をたよりに、転換期にある定時制課程の高等学校の現状の課題を明らかにすることである。

研究の方法として次の三点を順に行っていく。

第一に、日本の学校における一般的な教室において「秩序」と「混沌」がどのように形成されているのかを山口の「秩序」と「混沌」概念の議論をたよりに解釈し、妥当性を検証する。

第二に、従来の夜間定時制高校では、一般的な教室における「秩序」と「混沌」は成立していたのか、当時の文献をたよりに考察する。

第三に、従来の夜間定時制高校の「秩序」、「混沌」のあり方と、昨今の多部制定時制高校のそれらとを比較し、その課題を明らかにする。

### 4. 一般的な教室では「秩序」と「混沌」はどのように形成されているか

まずは日本の学校における一般的な教室において「秩序」がどのように形成されているのか考察していこう。

教室の「秩序」は、素朴に考えれば、教師の指導によって形成されていくと思われるかもしれない。しかし実際はどうかだろうか。

学校の教室の現実を描き出すものとして、2007年ごろから「スクールカースト」と呼ばれる教室内の階層の存在が指摘されている(鈴木 2012)。「スクールカースト」とは、「クラスメイトのそれぞれが「ランク」付けされている状況」(p.27)を指す。児童・生徒たちは、教室において何らかのグループに所属しており、その力関係の差から階層ができていく。たとえばある教室では

「ギャル」グループが一番力を持っており、その下は「普通」グループ、そしてその下には「地味」グループが存在するというようになる (p.97)。カーストにおける上位グループは、「言いたいこと」が「(みんなに) 通る」(p.117) ほどの力を持っており、逆に下位のグループは上位グループに従うという形で学校生活を送っている。

この議論で重要なことは、教師もスクールカーストの存在を重要視し、「積極的に学級経営の戦略として利用している」(p.263) ということである。むしろ教師がこのような「勢力関係の把握 (p.254)」の判断を誤ると、クラスが立ちいかなくなることさえあるという。

この議論を踏まえるならば、一般的な教室においては、教師によってのみならず児童・生徒が形成するスクールカーストが基盤となりその「秩序」が形成されていると考えられる。

カーストの下位に位置付けられる者はカーストの上位者によって支配されており、スクールカーストがあることでクラスは「秩序」立っている。教師は、場合によってはその「秩序」に乗るしかなく、もしそのようなカーストに対立する姿勢を見せると、授業不成立や学級の荒れにつながってしまうこともある。

では、このような現状の中にあって、もしもクラスのどのグループにもうまく馴染めないような児童・生徒や、一人であることを好む者や、あるいはそのクラスに属していながら、そのクラスに属することに価値を見出していない者がいたとすれば、そのような生徒(児童)たち「スクールカースト」内のいかなる位置に置かれてしまうのだろうか。

山口の議論を参照してみよう。

文化のプラクシスの中に生きて、これを疑わない人間の世界像は、多かれ少なかれ、己れを中心とした同心円を形成しており、当然のことながら境界を円周として持っている。中心はもちろん円心と重なる「私」であり、この「私」は「彼」、「我々」に対する「彼ら」、「この世界」に対する「彼方の世界」という外で意識化される円周およびその彼方の部分に対置する形で、世界の像を描く。この円周の部分に現われる「彼ら」は他者の原像を提供する。とはいえ、円周は流動的であり、拡大したり、縮小したりするから、「内」と「外」と言う観念は決して固定的なものではない。円環内の「我々」は運命を共有し、共に裕かになったり、共に窮乏を味わったりする。彼らの利害は、基本的には我々のそれに対立し、「彼ら」は我々の成功を妬んでいる。我々は共に住み、助け合い、理解し合い(実は、そうでは

ないのだが、この際そういったずれは問題ではない)、喜怒哀楽を共にし、同じように考える。ところが、「彼ら」は我々と交わらず、理解不能であり、不吉な赤の他人である。(pp.88-89)

この議論を敷衍するならば、スクールカースト内のどのグループにも属していない者は、クラスの一員でありながら、クラスのグループのどこにも属さない者として、そのクラスの周縁に追いやられてしまうと考えられる。ここでいう「周縁に追いやられ」とは、クラスにいなながら、そのクラスの一員ではないような扱いをされることを意味する。

スクールカーストによって「秩序」だっているクラスにおける支配者、すなわちカースト上位者から見れば、そのような者たちは、クラスにいなながらクラスのグループのどこにも属さないという意味で「混沌」の側にいる者のように見えるかもしれない。そしてそのような者たちは、「理解不能」の「不吉な他者」なのである。

たとえば、学校に来たばかりの転校生や、まだ日本語をうまく話せない外国につながる児童・生徒や、あるいは何らかの理由で教室に継続して入れず、どのグループにも属せ(さ)ないような児童・生徒たちは、そのような状態に追いやられてしまう可能性がある。

山口が、「文化のプラクシスの中に生きて、これを疑わない人間の世界像」と述べているように、スクールカーストの存在は、必ずしも当事者たちに自覚されない。そして、そのような「不吉な他者」の存在が際立つほど、そのコミュニティはより強い「秩序」を志向してしまう。

鈴木は、スクールカーストを分析する中で、どのグループにも属さない生徒はどのように扱われるのかを述べている (pp.111-116)。鈴木によればそのような生徒は、カーストの「最下層」(p.111) に位置付けられ、時にクラスメートからの嘲笑の対象になったり、いじめの対象になったりするという。

以上の考察のように、一般的な教室の現実における「秩序」は、時にスクールカーストに馴染めない者が排除されやすい場を形成してしまう可能性がある。

山口の議論は、鈴木スクールカーストの議論と一定の整合性があると考えられる。

## 5. 従来の夜間定時制高校は「秩序」と「混沌」をどのように扱ってきたか

### 5.1. 従来の夜間定時制高校においてスクールカーストは成立しえたのか

前章では、一般的な教室における「秩序」、「混沌」がいかに形成されるのかを見てきた。それでは、従来の夜

間定時制高校では、これと同様のことが成立していたのか検討していこう。

本節では、多部制定時制高校ができる前の夜間定時制高校を対象を絞り、従来の夜間定時制高校がいかにして学校としての「秩序」と「混沌」を扱ってきたか見ていこう。

### 5.1.1. 夜間定時制高校教諭、脇浜の言葉より

夜間定時制高校教諭としての経験を持つ脇浜 (1999) は、夜間定時制高校の様子を次のように語る。

定時制高校は、中軸的な学校教育システムから疎外され、差別されていることからくる気安さもあって、かなりのんびりしている。偏差値競争もなければ、刑務所の囚人を管理するような学則もない。特に私の学校は学校というより広場という雰囲気、先生も生徒も勉強の進度とか効率に縛られることなく、毎日楽しんでいる。(p.132)

脇浜の語る夜間定時制高校は、我々が素朴に考えるような学校のあり方とは大きく異なるようである。

脇浜の勤め先の定時制高校は、学校でありながら「学校というより広場という雰囲気」を持つ、いわば学校でありながら学校ではないものとして成立しているようだ。「広場」とは、様々な人々が自由に行き来できる場所のことである。その意味で、この学校は、脇浜の言うように我々が素朴に考えるような学校像とは異なる、「のんびり」した場所であったことがうかがえる。

それでは、このような学校においては、先に挙げたようなスクールカーストは成立しえたのだろうか。

もちろん、この夜間定時制高校のクラスにおいても趣味とか境遇で結びつくような様々なグループがあった可能性はある。しかし「広場」のような雰囲気である脇浜の夜間定時制高校では、それらグループの力関係によるカーストが発生するとは考えにくい。むしろそのような学校では、生徒たちが、お互いに干渉せず、自分のいたいようにそこにいるような、そういうあり方が許容されていたのではないだろうか。d

脇浜の夜間定時制高校は、一般的な教室で起きうるスクールカーストが基盤となりその「秩序」が形成されているような場が、成立しづらい構造を持っている可能性がある。

それはもしかししたら、脇浜の夜間定時制高校が、一般的な学校像に対して、学校でありながら、広場でもあると言う「多義性」を持った「混沌」としての学校であるからかもしれない。このことは、脇浜が彼の夜間定時制高校を「中軸的な学校教育システムから疎外され、差別されている」と述べていることから示唆されている。

この夜間定時制高校は、一般的な学校像を「秩序」だった中心と想定するならば、その文化の周縁に位置する「混沌」としての学校として自らを位置づけていたのではないだろうか。

もちろん、全ての夜間定時制高校がこのような状態にあったとは言えないが、多部制定時制高校ができる前の夜間定時制高校は、学校文化における「混沌」を引き受けた上で独自の教育方法を採ろうとしていたと言えるのではないだろうか。

### 5.1.2. 夜間定時制高校教諭、A教諭の言葉より

もう一人、夜間定時制高校の教諭の言葉を挙げて考察の材料にしよう。当時の高校生を対象に書かれた『高校って何だ』という小島ら (1986) の中に、定時制・通信制高校について書かれた一節がある (pp.108-112)。ここに、ある定時制の工業高校教員の、生徒に向けた入学式でのあいさつが掲載されている。この教員を A としよう。少し長い引用する。

こんばんは、さて諸君、本校へ入学してほんとうにおめでとう。ええか、いま、君らがここにいる、この工高は、日本一の定時制高校なんや。日本一やで。こういうと君らのなかには、“なにいうとんねん。わしら勉強できんかったから、しゃあなしにこの学校へきただけや”と思うヤツもおるやろ。ちがうで。絶対にちがう。

そりゃ、勉強は苦手やったかもしれん。できんかったかもしれん。それがどないしたん。そんなもん、一からやりなおしたらええやん。ええか。いままでの君らがどうやったか。そんなもん、全然関係ない。みーんな、一から出発や。まかしとき、ここの先生に。—中略—

おい、あの後にあるサンドバッグ、あれはだれのもんや？ おまえのもんやんか！ おまえの。よし、今日は一発けて帰れ。もってかえったらあかんぞ。そやけど君のもんや。君らの座っているたたみ、頭の上の蛍光灯、黒板、マット、食堂、便所、教室、クーラー、テニスコート、それにまわりにおられる先生がた、みーんな君らのもんや。待ってたんやで、君らが来るのを待ってたんや。

ええか、この学校は、これしたらあかん、あれしたらだめ、そんなことばっかりいつてるショボクレタ学校とはちがうんや。これもやれるで。あれもやれるで。なんでもやらしたろ。ホラやってみろ。必ずできるから。ホーラできた。ヨーシよくやった。こういう学校や。これが日本一の定時制ということなんや。(pp.110-111)

A は生徒たちがこれまでの経験してきたであろう一般的な学校像と、この夜間定時制高校とを二項対立的に比較している。たとえば引用の後半において、A は他の高校や義務教育の学校など、これまで生徒たちが経験してきたであろう学校をひとからげに「ショボクレタ学校」と表現する一方で、自身の夜間定時制高校を「日本一の定時制高校」と表現している。

それでは、A の考える一般的な学校像とはどのような場所なのだろうか。読み取れる範囲で書き出してみよう。

- ・ 勉強ができるかどうかで判断される場所
- ・ 学習の積み重ねが必要な場所
- ・ ～をしてはいけないという規則のある場所

A が想定しているこのような学校像は、実際の学校の現実から見れば、過度に単純化されたモデルと言えるかもしれない。しかしながらこれは、一般的に考えられる建前としての学校像として、比較的受け入れやすいのではないだろうか。A はこのような学校像をあえて描き出し、生徒たちの前で批判する。

たとえば、「わしら勉強できなかったから、しゃあなしにこの学校へきただけや」という、それまでの学校についていけなかった生徒の気持ちを先取りした上で、それは「絶対に違う」と言い、「それがどないしたん」と、まともに取り合わない姿勢をとる。また高校は、義務教育を終えた者が学びに行く場所であるが、生徒たちのそれまでの学びの積み重ねについてなどには一切触れず、「みーんな、一から出発や」と言い切る。

小島らによれば、当時の定時制高校制の生徒は、「全日制に入れず、心ならずも定時制高校に来る生徒」(p.109) や「いったんは全日制にはいったが学校とあわなかったり、留年したり、処分されたりして退学し、再起を期して転・編入学してきた生徒」(同上) が主体であった。

そのような中であって、A のこのような言葉は秀逸である。それまでの学校での学びに何らかの理由で傷つき、しかも行きたくもない学校に行かねばならない生徒たちの気持ちを汲んだ上で、それまでの学校を取るに足らないものとしてあしらう表現を採りながら、定時制高校の魅力を分かりやすく説明しているのである。

さてここで注目したいのは、A がこの夜間定時制高校の「秩序」と「混沌」をどのように扱ってきたかということである。先に挙げた A の考える一般的な学校像から考察を始めよう。

A の考える一般的な学校像は、建前としては、学校的な「秩序」を志向し形成されていると考えられる。そもそも学校とは知識や技能の習得が目指される場所であ

り、それが習得できているかを判断するために試験が課される。よりレベルの高い内容を学ぶためには積み重ねが必要であり、そのために休日をものぞいては毎日学校にすることが求められる。また児童・生徒が守るべき規律を教えるために、校則等の規則が定められている。

しかし A はこの学校的な「秩序」を取るに足らないものとして扱い、そうではない場所として自身の夜間定時制高校を紹介する。

ただしここで留意しなければならないのは、A が学校的な「秩序」を批判しながらも、その全てを批判しているわけではないということである。

A は確かに生徒が現段階で勉強ができるかどうかにはこだわっていない。それまでの学習の積み重ねの有無も気にしていない。

しかしだからといって勉強をしなくてもよいとは言っていない。また学習の積み重ねが必要ないとも言っていない。むしろ「一からやりなおしたらええやん」と勉強することやそれを積み重ねていくことについて実は奨励している。

規律にしても同様である。A は確かに自身の定時制高校を「これしたらあかん、あれしたらだめ、そんなことばかりいつてるショボクレタ学校とはちがう」と明言し、「これもやれる」「あれもやれる」学校として提示している。しかしだからといって、本当に何でもしていいかということ、そうではない。

おい、あの後にあるサンドバッグ、あれはだれのもんや？ おまえのもんやんか！ おまえの。よし、今日は一発けて帰れ。もってかえったらあかんぞ。そやけど君のもんや。

一般的な学校的「秩序」の中においては、集会では規律が重んじられ、集会後にサンドバッグを蹴って帰るなどということが許可されているとは考えづらい。しかし A は、生徒たちにサンドバッグを蹴って帰ることを奨励するような物言いをしている。ただ、その一方で「もってかえったらあかんぞ」と、本当にサンドバッグを私物としてしまうことについては釘を刺す。

これも、先ほどの解釈と同様、これまでの学校で是とされてきたことを「ショボクレタ」ものと見なしながら、その全てを批判するのではなく、それとなく新しい規律のあり方を提示しようとしていると解釈できる。

このような A の論理は、先に述べた山口の「混沌」概念を用いると、より分かりやすくなる。従来の夜間定時制高校は、学校という文化の「周縁」に位置し、「混沌」にひらかれていた。それは「秩序」の側から見ると、得体の知れないものに見えたかも知れない。しかし「混

沌」にひらかれていたことによって、夜間定時制高校は、一般的な学校の中では手にすることのできない、新しい学びの仕方を提示できた。まさに「混沌こそは、すべての精神が、そこへ立ち還ることによって、あらゆる事物との結びつきの可能性を再獲得することができる豊饒性を帯びた闇」(p.1) だったのである。

それでは、従来の夜間定時制高校は、なぜここまで「混沌」にひらかれていたのだろうか。それはやはりそこに在籍している生徒たちの存在が大きいと考えられる。

実際、従来の夜間定時制高校には、一般的な授業を成立させようとしても一筋縄ではいかない現状があった。たとえば、奈良井(1995)は、彼女の受け持つ定時制高校の生徒たちは出席すれば成績が取れることを知っているので「限度となる出席のぎりぎりまで」休むことや、クラスの大半が「筆記用具、教科書、ノート」を持ってこない状態を述べている(p.57)。このような状況は、一般的な学校像からすれば「混沌」した状況に他ならないだろう。

このような状況の中、それでも生徒たちの置かれた境遇に思いを馳せ、その人生を肯定し、一般的な学校像の「秩序」を押し付けるわけではなく、それとなく学びに向かわせようとするところに、従来の夜間定時制高校の優れた点があるのである。

5.1.1.の議論と合わせて考えると、従来の夜間定時制高校は、学校でありながら学校ではない、一見すると相矛盾する機能をもつ、「多義的」な教育機関として自らを位置づけていたのではないだろうか。

従来の夜間定時制高校が学びの場としてどのように成立していたのかについて、現段階でまとめておこう。

従来の夜間定時制高校では、一般的に考えられる学校像を「秩序」側とするならば、「混沌」側であることを引き受けた上で独自の教育方法を探ろうとした。それは、一般的な学校では、何らかの理由でうまく学べなかった、多様な生徒たちに対応するために採られた方法でもあった。

## 5.2. 夜間定時制高校における「混沌」の扱いについて

二つの事例を通して、従来の夜間定時制高校が、学校としての「秩序」と「混沌」をどう扱ってきたのか見てきた。

当時の夜間定時制高校の教諭たちが当時の様子を振り返った記述を紐解くと、何からの理由でそれまでの学校(あるいは社会)にうまく馴染めなかった生徒たちの様子が描かれている。そしてそのような記述からは、夜間定時制高校の教師や生徒が、自らの学校と全日制高校や義務教育課程の学校とを、次のような対比の中で捉えていたことがうかがわれる。(表2)

表2 全日制高校や義務教育課程の学校と夜間定時制高校との生徒像の比較

| 全日制高校<br>義務教育課程の学校   | 夜間定時制高校   |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>朝から昼にかけ学ぶ</li> <li>受験を経て進学先を勝ち取る</li> <li>(家庭に)一定の経済力がある</li> <li>一定の基礎学力がある</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>夜に学ぶ</li> <li>生活環境が原因で、あるいは受験に失敗して否応無しに行く</li> <li>(家庭の)経済力に乏しい</li> <li>基礎学力に乏しい</li> </ul> |

当時の夜間定時制高校(の教師)は、この図式を理解した上で、あえて全日制高校や義務教育課程の学校を一般的な学校と見なし、そこでの「秩序」などは、取るに足りないものとして批判し、むしろ「混沌」こそが価値あるものなのだと生徒に強く伝えているように見える。その意味で、従来の夜間定時制高校は、全日制高校や義務教育にとって危険な存在であったと言えるかもしれない。

山口は、『文化と両義性』の第4章の中でフランスの歴史家ミシュレを「文化の構造論的ダイナミクスに基礎を置いた記号論の視点」(p.148)を先取りしていた者として高く評価し、ミシュレがキリスト教における魔女やサタンについて考察したものを多く引用している。その中に、次のような言葉がある。

人びとはかつて破廉恥にも言ったものだ、「笑う者どもに不幸あれ!」と。この言葉は、サタンだけが笑う権利をもっていることを認めること、しかも笑うことがひとを楽しませると公言するほかならず、前もってサタンにあまりに過分の分け前をあたえることであつた。もつとはっきり言おう、笑うことは必要なものである。というのは、笑いとはわれわれ人間の本性の本質的作用なのだから。[中略]

ローマ教会が投げ棄てたもうひとつの、小さなものがある、「論理学」、自由な「理性」だ。これこそすてきに美味しいものなのだし、だからこそもうひとりの男は食欲にそれを手に入れてしまう。—中略—

ルネッサンスが起こったのは、さらにそれ以上に、「学校」や教養ある人びとから遠くはなれたところ、サタンが魔女たちや羊飼いたちに授業を授ける道草教室エコーレ・ビュイヴニエールにおいてなのである。

この上ない危険をとまなう教育だった、が、こうして危険を冒すことがかえって新奇なものへの愛を、ものを見たい、ものを知りたいという度はずれの欲望をかきたてたのである。(ミシュレ 1983 :

pp.27-28)

ここでのサタンは、「秩序」に縛られ笑うことさえできなくなってしまった者たちを嘲笑い、当時のローマ教会が手放した「論理学」や自由な「理性」を手に入れ、秩序からは遠く離れた場所で教育を施す存在として描かれている。そしてこの教育こそ、後のルネッサンスの礎を築くものとして位置づけられているのだ。

このような考えを、先の夜間定時制高校になぞらえるのであれば、当時の夜間定時制高校は、「混沌」側であることを受け入れた上で、真に意味のある生活を送るための独自の教育方法を採ろうとした点において、サタンの学校であったと言えるかもしれない。

サタンの学校は、学校的な「秩序」の側からみれば脅威である。しかしそこには重要な学びがあり、後の社会の礎にもなりうる可能性を秘めていた。

## 6. 多部制定時制高校は「秩序」と「混沌」をどのように扱うべきか

それでは、新しいあり方を模索している多部制定時制は、「秩序」や「混沌」をどのように扱うべきなのだろうか。

多部制定時制高校は、先に挙げた夜間定時制高校のような、一般的な学校像の「秩序」を批判し「混沌」側であることを引き受けるようなあり方はとっていないように思われる。それは本稿 2 章でも述べた以下の二つの点に関係していると考えられる。

- ・ 従来の夜間定時制高校より、さらに多様化した生徒たちへの対応が求められていること。
- ・ 全日制高校と比べてより複雑にならざるを得ないシステムを、いかに構築していくか考える必要があること。

先にも述べたように、近年の定時制高校は「多様な学びのニーズへの受け皿」としての役割を与えられている。しかしそれらの「ニーズ」に本当に全て応えようとする、それはそれで無理が生じる。しかしだからと言ってそれを放置しておく「混沌」は増大し、やがては学校として機能しなくなる可能性もある。そしてその「混沌」は、学校なるものを求めて入学してくる生徒の「ニーズ」に対してそぐわない可能性もある。そのような「ニーズ」に応えるためには、放置しておけば崩壊してしまう複雑なシステムをより効率的に機能するものに常に更新し続けなければならない。多部制定時制高校の「秩序」化はこのような背景においてなされていると考えられる。

山口は「秩序」が志向される際の「混沌」との関係性を次のように述べている。

文化は、無定形の自然に、絶えず新しい秩序を与えることによって成り立つ。そういった意味で、文化の枠として成立している世界観は、絶えず新しく形成される混沌を秩序の中に組み込む装置として働く。したがって文化のプラクシスは決して固定したものではなく、流動的でダイナミックである。秩序と混沌の接点はいつも固定しているわけではなく、それは絶えず移動している。文化は、そういった視点から見ると、絶えず増大するエントロピーとの葛藤の過程として捉えることができる。

(p.103)

このように考えると、これからますます複雑で多種多様な学びの「ニーズ」が出てくると予想される多部制定時制高校は、「混沌」を「秩序」の側に組み込み、「秩序」を志向し続ける可能性がある。

## 7. 新しい定時制高校のためのアイデア

### 7.1. 多部制定時制高校の全日制高校的「秩序」化の問題点

これまで従来の夜間定時制高校と新しい多部制定時制高校を「秩序」と「混沌」という概念を通して検討してきた。

特筆すべきは、一般的な学校像を想定し、その「秩序」を批判し、「混沌」の側であることを引き受けた上で、独自の教育方法を採ろうとした従来の夜間定時制高校のあり方である。

従来の夜間定時制高校のこのような学校文化の構築の仕方が、果たして妥当性を持ったものであったかどうかは検討の余地がある。しかし、少なくともそれまでの学校生活にうまく適応できなかった者たちに対して、同じようなあり方は繰り返さないという方法を採用しようとしている点においては評価できよう。

一方、複雑で多種多様な学び手の「ニーズ」に特に応えることが期待される現在の多部制定時制高校は、放置しておけば、学校として成立しなくなる可能性もあることから、全日制高校的な「秩序」が志向され続ける場であることが考察された。放置しておけば過度な「混沌」を生み、学校としての体裁が保てなくなる可能性があり、それが生徒たちの「ニーズ」にそぐわないと判断されるならば、定時制高校の「秩序化」は現実の問題として避けては通れないであろう。

しかし、ここで課題となるのは、それまでの学校の学



びにうまく適応できなかった生徒たちが多部制定時制高校において一定数いるということである。そしてそのような生徒たちは、本稿4章で述べたようなスクールカーストの中で、不当に周縁に追いやられてしまった生徒たちなのかもしれない。

そのような生徒たちにとって、学校的な「秩序」をそのまま志向し続けることは果たしてよいことなのだろうか。

先に述べた多部制定時制高校の「秩序」の構築は、素朴に教師による「秩序」形成に重きが置かれているものであった。しかし、スクールカーストの議論が示唆するように、実際の教室の「秩序」は、教師によってのみならず児童・生徒が形成するスクールカーストが基盤となっており、それは教師によってコントロールできない場合もありうる。

それゆえ、多部制定時制高校においては、安易な学校的「秩序」を志向することは問題なのである。

## 7.2. 緩やかな「秩序」の解体と再構成について

教師たちが志向する学校的な「秩序」は、これまでの学校教育に馴染めなかったり傷ついてきたりしたような者たちにとって、生気を失わせるようなものであるのかもしれない。仮に学校的な「秩序」が実現されたとしても、生徒たちの生き生きとした学校生活や学びは実現され得ないのかもしれない。

スクールカーストに縛られ、自由に身動きが取れないような教室をどのようにするのか、ということと、一般的な学校像としての「秩序」が志向され、生気が失われてしまったような生徒たちをどのように生气づけるのかという議論は、もしかしたら同じなのではないだろうか。

「秩序」を志向し続ける多部制定時制高校にはどのような未来が待っているのだろうか。

第一に、それはそれまでの学校生活に馴染めなかった者たちが、同様の傷を負いながら、なお行かねばならない学校となるだろう。そのような未来は生徒たちのニーズに応えようと奮起する多部制定時制高校としても本意ではないはずである。

第二に、そのことで多部制定時制高校そのものの意義が失われてしまうかもしれない。

山口は「秩序」と「混沌」が「相補性」(p.149)に基づいていることを指摘した上で、次のように述べる。

この「開かれた」状態が閉じられたら、それは、「秩序」そのものを支え絶えず生成させる根源的な諸力の崩壊としてのエントロピーの増大にそのままつながることになる。しかしながら文明が保証する「秩序」とは、そういった諸力からの逃避によって

動機づけられてきたこともまた確かなことである。  
(pp.151-152)

「混沌」をすべて排除し「秩序」のみになった時、「秩序」と「混沌」の相補性は成立しなくなる。山口は「混沌」なき共同体が、やがて終焉を迎えることを示唆している。

我々は、学校としての「秩序」を志向しながらも「混沌」であることを引き受けるようなバランスの取り方を探らなければならない。それではそれはどのようにしてなされるのか。

問題は複雑である。その「秩序」をただ打ち壊せばいいというような単純な話でもないはずだ。

我々は生徒たちの現状に即しながら、「秩序」を緩やかに解体し、その上で、新しい「秩序」を再構築していく必要があるのではないだろうか。

この「秩序」の緩やかな解体と、新たな「秩序」の再構築の方法については、近い将来考察すべき課題とし、本稿の考察を終える。

<sup>1</sup> 東(2017)が自身の「観光客論」において、この概念から示唆を得たことを述べている。

<sup>2</sup> 地方には、その地域の要請に応じて日中に授業時間が設けられる「昼間定時制高校」もあった(たとえば酪農地域など)。しかしこれは、平成につくられた「昼間定時制高校」とは全く別のものであることに留意されたい。

<sup>3</sup> 地域による違いは大きい。

<sup>4</sup> 学校数は減少傾向にある。

<sup>5</sup> 当時のローマ教会では、キリスト教徒として信仰の中に生きることは、キリスト教を学び祈りを捧げ救済を求めるとともに、信仰にとっては許されざるものを規律となければならない、と考えられていた。「魔女狩り」はこの文脈において行われたと考えられる。「魔女狩り」の論理は現代の我々からすれば詭弁である。しかしそれが解き明かされるとローマ教会にとっては都合が悪い。ローマ教会にとっては、そのようなことを明らかにしてしまう「論理学」や「自由な理性」は排除すべき対象であったのだろう。

## 引用文献

- 東浩紀(2017)『ゲンロン0 観光客の哲学』ゲンロン  
板橋文夫・板橋孝幸(2007)『勤労青少年教育の終焉 学校教育と社会教育の狭間で』随想舎  
小島昌夫・太田政男・佐藤善一(1986)『学校って何だ』、高校生の本②、大月書店  
奈良井瑞恵(1995)「定時制高校の授業成立を目指して 一教科書をノートにして一」国語教育研究(38) 広島大学教育学部光葉会、pp.55-66  
ミシュレ(1983)『魔女』上巻、篠田浩一郎訳 岩波文庫(Jules Michelet: *La Sorcière*, Edition originale publiée avec notes et variants par Lucien Refort, Tome I, II, Paris, Marcel Didier, 1952, 1957)  
文部科学省(2013)「文部科学省中央教育審議会高等学校教育部会第19回資料」、資料2-1 定時制・通信制課程について  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryu/\\_icsFiles/afieldfile/2013/07/12/1336336\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryu/_icsFiles/afieldfile/2013/07/12/1336336_1.pdf) (2018年12月27日確認)  
山口昌男(2000)『文化と両義性』岩波現代文庫(山口昌男『文

---

化と両義性』岩波書店、1975年)  
脇浜義明（1999）『教育困難校の可能性 定時制高校の現実か  
ら』岩波書店